



私は、1月27日から2月7日までの12日間、第26回高校生による海外エネルギー事情研修会に参加しました。研修を通して、私は日本では絶対に体験できない様々なことを体験することができました。

もちろんエネルギーの勉強が中心なのですが、エネルギーの知識だけでなく、グローバルなものの見方や考え方を身に付け、少し大人になって帰って来ることができたと思います。以下、この二週間の海外研修を振り返り、感想を述べようと思います。

1. 研修全般について

今回の研修の一番の目標は、自分の意見をしっかりと持ち、フランス、スウェーデンの高校生と意見を交換してくることでした。結果から言うと、目標は達成できたと思います。

まず、現地の高校生とのディスカッションを行うにあたり、最初に感じたのはエネルギーに対する意識の違いです。彼らは、エネルギー分野を専門に勉強しているわけではないのに、私たちよりも多くの知識、情報を持ち、興味関心も日本の学生とは比べものにならないくらい高いと感じました。また、生徒一人一人が、違う自分なりの意見を持ち堂々と意見を述べている姿を見た時には、本当に高校生なのかと思うほどでした。

スウェーデンのカテドラル高校でのディスカッションでは、最初は「日本とスウェーデンの発電の状況とこれからどうしていくべきか」というテーマでした。話し合いを進めていく中で、現地の高校生から「原子力を使うのもいいのだが、それ以外にも根本となる消費電力を減らす方法を考えるべきだ。」という意見が出ました。確かに、日本で電気は空気のように当たり前のように存在し、息を吸うように使われています。しかし、電気を作るための原材料のほとんどが無限にあるわけではありません。そのため、今一度、電気というものの大切さを再確認するべきだと思いました。今回のディスカッションでは、具体的にどのようにして消費電力を減らすか、という意見は出ませんでした。が、「日々少しずつ消費電力を減らすために意識していく。」ということでもとまりました。

今、スウェーデンでは、原子力発電の割合を減らすために、海上で風力発電を行う洋上風力発電や、海の潮で発電する方法が進められています。騒音などの周辺への環境問題などがあり、まだまだ試験段階らしいのですが、どんどん原子力以外の発電方法へとシフトしていく方針だそうです。

次のフランスでは、中学校でエネルギーについて考えを発表する時間があり、各発電方法の長所と短所について全員がしっかりと学んでいることを知り驚きました。

2. 各施設見学について

まず、私たちはフォルシュマルク中・低レベル放射性廃棄物貯蔵施設の見学に

行きました。そこでは、地下に設置している使用済み燃料のモデルも見せてもらいました。使用済み燃料は鋼鉄、銅、ベントナイト（粘土の一種）で覆われており、これは万が一貯蔵している途中で氷河期が来ても耐えられるようにしているそうです。また、現地の人々は貯蔵施設を作ることに反対した人は少なかったようです。それは、原子力が彼らにとって非常に身近なものであったことと、スウェーデンは地盤が固いため、地下での貯蔵が安全だと考えたため、反対する人が少なかったようです。また、反対する人がいるとSKB社の担当者がその人の家を訪れ、質問や意見に真剣に向き合い、責任を持ってその質問に答えていたそうです。時間のかかる方法ではありますが、非常に重要なことだと思います。

日本でもその土地の特徴や人々と真摯に向き合うことで、放射性廃棄物の最終処分場を見つけることができるのではないかと思います。

フランスではオラノ社 ラ・アーク再処理工場に見学に行きました。日本の再処理施設との大きな違いは、使用済み燃料の作業を日本ではすべて水中で行うことで放射線をシャットアウトするのに対して、フランスの再処理施設では空気中で行っていたことです。私は「コンクリートの壁一枚で平気なのか」と尋ねると、最初は水中で行っていたとのことでしたが、ラ・アーク再処理工場は使用済み燃料が世界中から輸送されてくるため、効率を上げるために空気中で行っているとのことでした。空気中で行っていても、被ばくしたなどの報告がないのでこのまま続けていくそうです。そして、使用済み燃料を世界中から受け入れているラ・アーク再処理工場で、一番多く輸送してくるのはオランダだということもわかりました。また、すべての作業を機械が行い、その機械のメンテナンスをまた別の機械で行うことで、工場で働く人を放射線から守っているという点は日本と同じだと感じました。

3. 私が初めて海外に行って感じたこと

私はあまり英語が上手ではないため、海外に行くのは非常に不安でした。最初、現地の高校生と会話をしていると、どうしても聞く側に回ってしまい、なかなか会話の中に入っていけず、他の5人のメンバーに非常に助けられました。しかし、ずっと英語を聞いているとだんだん慣れてきて、カテドラル高校との交流の時には普通に喋ることができていて成長しているなど実感しました。また、文法などが少しわからなくても単語と笑顔で乗り切れるものだと思います。スウェーデンの高校生もフランスの高校生も非常にフレンドリーで話しやすかったです。

また、はじめてこの目でヨーロッパの建物を見たときはとても感動しました。日本では見られないような整った町並み、景観と美しさ、数世紀も前の建造物が今もそのまま残っているということは、そこに住む人が大切に守っている証拠だと思います。ただ、例年とは違い、フランス、スウェーデンも日本と同じく暖冬だったことが非常に残念です。暖かく過ごしやすいのはよかったです。

が、両国ともに雪が全くなく、フランス、スウェーデンの雪景色をこの目で見ることはできず、この研修会唯一の心残りとなりました。

4. まとめ

私は工業高校の電気科に通っており、日々電気について学んでいます。そのため自分の知識の量にある程度の自信を持っていたのですが、今回の研修でのプレゼンテーションや現地高校生とのディスカッションを通して、まだまだ勉強が足りないと感じました。日本も、フランスやスウェーデンを見習ってエネルギーについて考える時間を授業でつくることで、エネルギーについての基礎知識を上げていくべきだと思います。そうすることで、日本の未来のエネルギー事情は大きく変わってくると思います。発電方法などに関しては知っていても、自分なりの意見を持たなくてはいけないため、これからは自分の意見を持ち、その意見に自信を持てるように学びたいと思います。

いま日本では、様々な発電方法が行われています。どの発電方法にも長所と短所があり、一概にどの発電方法が正しいとは言い切れません。これは私の意見なのですが、まだ、どの発電を止めてどの発電に力を入れるという決断をするには、早すぎると思います。まだ見つかってない新しい発電方法もあると思うからです。しかし、その新しい発電方法をただ待つだけでは問題の先延ばしにすぎません。いま私たちにできることは、節電だと思います。大きいことばかり言っても何も始まらないと思います。そのため誰でも簡単に始められる身近な節電から始めていくべきだと思います。

5. 今後に向けて

今回の研修を終えて、私は考え方が少しだけ変わったと思います。授業を受けていても前とは違う視点でものを見て考えられるようになったと思います。また、英語の大切さも知りました。どこの国に行っても英語はコミュニケーションの道具として使うことができます。だから英語は引き続き勉強していこうと思いました。そして、この研修会は一生涯役に立つと思います。現代社会では、インターネットの発達で知識だけなら誰でも簡単に手に入れることができます。ただの知識だけでは、その情報に何の重みも価値もありません。しかし、今回の研修会に参加して得たことは、大変貴重な経験となりました。

私の将来の夢は、工業高校で教師になることです。今回の研修会は、自分の夢を実現させるための大きな一歩になると思います。

今回の研修では、様々な人と意見を交流したり、異国の文化を体験するなど、普通の学校生活では得られないような経験をたくさんさせていただきました。

本研修に関わった方々、随行者の方々、そして、一緒に行った5人の高校生の協力に感謝を忘れず、これからの明るい人生のため日々精進していきたく思います。貴重な体験をありがとうございました。

